

学長挨拶 ボランティア活動の先にあるもの

明治学院大学は、ボランティア活動が活発であることが校風の一つとなっています。この校風は、学生の主体的意欲と教職員のサポートが基盤になっていると考えています。23年前に起きた阪神・淡路大震災のおりも、まず被災地に駆けつけたのは有志の学生であり、大学は彼らの活動サポートを契機にボランティアセンターを立ち上げていくことになりました。東日本大震災支援も学生とボランティアセンターの働きがさまざまな成果をあげてきています。その明治学院大学ボランティアセンターも2018年に設立20年を迎え、2018年度には、いくつかの記念企画が検討されています。また、白金キャンパスのボランティアセンターは10号館に移動し、より親しみやすい環境が整えられる予定になっています。

本学は10年後の「あるべき姿」を想像し、将来を見据える中長期計画を定めたMG Decade Visionを2015年度よりスタートしました。内容は多岐にわたりますが、そのなかで重点を置く三つの柱の一つとして「ボランティア活動の活性化」を掲げています。2016年度にスタートした「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム」は、まさにビジョン実現の第一歩です。このプログラムでは、実際のボランティア活動、教養教育センターや各学部・学科が提供する科目、そしてインテグレーション講座という内容でボランティア活動と教育とが結び付けられるようになりました。プログラムには学部・学科を超えて、学生・院生・教職員が参画します。

ボランティア活動は、在学時代だけで終わるものではないでしょう。私のゼミの卒業生の一人は、卒業後社会人となっても在学時代のボランティアを継続していきました。もちろん、生活する環境が異なるわけですから、ボランティアを行う場所や内容が異なることもあるかもしれません。また、卒業時には継続、参画していなくても、時が経ち、機会を得て活動を再開するケースもあります。さらには、在学時代にはボランティア活動の経験がない方が活動に参加する可能性もあります。ボランティア活動を大学時代の「よき思い出」だけにしないことが標題の「ボランティア活動の先にあるもの」含意の一つになります。この報告書における活動に携わった方々が、在学中も卒業後も、活動で得た成果を本学にフィードバックしていただきたいと願っています。

標題の今一つの含意は、ボランティア活動によって多くの人々との関係が構築され、相互の交流のなかで多くの学びがあり、ボランティア活動をする者に大きな成長の糧を提供するという事です。他者との関わりは、自分を問い直すことにもつながります。私も学生時代の子ども会活動を通じて、子どもやその家族たちから多くを学び、また自分のありようを問いかける質問やコメントを受け取りました。私自身がこの経験にどう向き合うことができたかは、自分だけでは評価しにくいもので、友人等の関係者に判断を委ねなければなりません。他者の存在をあるがままに受け止めることが、自己を認め、前向きな変容を成し遂げていくことに寄与するものと考えます。

ボランティアセンターが新たな地平に向けて、学生や院生とともに歩み始めるための振り返りと多くのヒントをこの報告書を通じて得られれば幸いです。学生たちの多様な活動を基盤としながら、ボランティアセンターが明治学院大学の基軸としての組織としてさらに活発な活動を展開していくことを期待しています。

2018年3月

学長 松原康雄

ボランティアセンター長挨拶 ボランティアセンターの今、これから —「私たちのボランティアセンター」となるために—

スタッフ2名で阪神・淡路大震災の支援をきっかけにスタートしたボランティアセンターは、来年度で20周年を迎える。この20年でボランティアセンターは存続するだけでなく大きく成長した。今年度のセンタースタッフは15名、この一年何らかの形でボランティアセンターに関わった学生は報告書の延べ人数で1,500名を超えている。本報告書には、それらの学生の多種多様な活動の熱い記録がある。「日々自問自答」しながら、「私たちが地域のためにできることは何か」と悩み、自らの限界を知り、それを超えて「地域の人々と楽しみを共感する喜びを感じ」、「聞き手を意識した学びや発信の大切さに気づき」、新たな繋がりを得て逞しく成長する学生たち、それを見守り支え、ともに悩み成長するコーディネーターと職員の姿がある。他大学との交流、国際機関実務体験プログラムなどの関連した活動やボランティアファンド学生チャレンジ賞、Gakuvo Style Fundなどのボランティア活動を支える取り組みについても報告されている。ぜひ堪能していただきたい。

しかし、いかにこれらの活動が素晴らしくとも、ボランティアセンターがこのままでよいということではない。2016年度開始した明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラムは2年目を迎え、登録学生との関わり、学部学科との協働の難しさを痛感し、ショート講座の実施、サティフィケートプログラムだよりの発行などさまざまな取り組みを行った。来年度（完成年度）の成果を見極め、さらなる変容を目指す必要がある。1 Day for Others、「Do for Smile@東日本」プロジェクトなど、順調に進んできた活動も、改めてニーズを問い直し、リーダー学生の組織化を図るなど新たな動きを必要とした。

システム論では、システムが生き残ること、成長すること、変容することの三つがシステムのゴールとされる。個人、家族、チーム、大学などすべてのシステムはまず生き残り、発達段階にそって成長し、そして環境の変化に応じて変容することによってさらなる成長を遂げる。センターが目指す姿はどういうものなのか、そのためにどのように成長し変容していけるのか。全体研修を行いスタッフ全員で何度も問い直した。ボランティアセンターというシステムの一員として、どのようなチームを組んで何をを目指すのか、学生とどのように関わるのが「適切」なのか、学生の自律性を育むとは。そもそも大学にボランティアセンターが在る意味は何なのか。全体研修の場だけでなく、日々の業務のなかでも熱く論じた。先達の少ない大学ボランティアセンターの先陣を切って突き進んで来た私たちが、改めて在り方、進むべき道を模索し、変容するための一年だったのだと思う。

システムの適切な変容のためには、境界の透過性を増し、より柔軟に開かれた組織となる必要がある。ボラセンの壁を作り「ボラセンの学生」を増やすのではなく、広く開かれた「学生のボラセン」となるにはどうしたらよいのか。センターを20年間維持し、その発展を支え続けたのは大学であると同時に、地域の方々、卒業生・修了生の皆さまである。願わくば、教職員、卒業生・修了生、地域の方々を含め、すべての方に開かれた組織としての「私たちのボランティアセンター」となるべく、その方策を具体的に検討することが今後の課題である。

この報告書を出発点として、2018年度、改めて、それらの方々との繋がりを再確認し、明治学院大学が「他者への貢献」を具現化する一つの形として、学生たちとともにボランティアセンターのこれまでとこれからを見据え、発信する年としたい。

2018年3月

ボランティアセンター長 杉山恵理子